＜論文＞

育児意識と育児支援欲求の関係

Relationship between the consciousness of childcare and the desire for childcare supports among women's college students and their mothers

田　島　啓　子[1)]　　雨　宮　由紀枝[2)]　　水　野　恵　子[1)]

Keiko TAJIMA, Yukie AMEMIYA and Keiko MIZUNO

Abstract

The purpose of this questionnaire study was to make clear the relationship between the consciousness of childcare and the desire for childcare supports among 245 women's college students and 35 their mothers. While more than half (53.9%) of students showed the vision such that childcare is the woman's obligation, indicating the strong belief of sex-roll, most of them accepted the existence of instinctive maternity (mother's love), and also, affirm that the childcare is meaningful and pleasant.

Factor analyses revealed that, although there was only a little deference in the factor structure of consciousness of childcare between students and their mothers, the analysis of the desire for childcare support showed mothers'special factor named as "desire for their friends'support", that was not found in students'structure. This results indicated that mothers really accepted the importance of friends'support for childcare because of the little husbands'support. The results on the relationship between the consciousness of childcare and the desire for childcare supports indicated that students and their mothers who show the higher consciousness of childcare, especially feeling of meaningfulness in students and that of happiness in mothers, require much more childcare support.

keywords : *Consciousness of childcare, desire for childcare support, questionnaire study*

Ⅰ．問　　題

子育ては，従来女性によって担われてきた．しかし，近年女性の社会進出はめざましく，諸官庁はいうにおよばず，企業においても女性の総合職，管理職は，もはやめずらしいことではなくなってきた．しかし，それとともに育児に対する関心や意識（子育てに関する考え方）も一昔前とは，大いに変化してきていることが伺える．また，多くの子育て家庭が育児に大きな不安を感じ，特に専業主婦により高い不安傾向が見られることが明らかになり（経済企画庁調査1997，こども未来財団2001），育児をするすべての人を対象とした育児支援が社会的な要請となっている．

こうした問題の背景として，育児に対する関心や意識（子育てに関する考え方）の変化が注目されている．大日向（1977）は，わが国の昭和初期（A 世代：1976年調査当時平均年齢67.2歳），第 2 次世界大戦後の混乱期（B 世代：同54.6歳），現代（C 世代：同31.5歳），の各時期に育児を担当した女性たちの母親としての意識・行動を調査し，母親としての意識や行動は社会情勢や時代状況とともに変容していることを明らかにした．お茶の水大学卒業生を対象とした調査であるため一般化には限界はあるものの，古い世代は母親業についての満足度が高いのに対し，新しい世代の育児に対する評価の低下や母親の心理負担や不安感の増長などの変容を指摘した．C 世代の母親たちは2005年では平均60.5歳となるが，婦人解放運動をはじめとして世界規模で女性の生き方が再検討されている時代における育児であり，育児以外に自分自身の生活や生きがいを求めたいという欲求の強い世代と分析した．大日向の研究は，日本における伝統的母性観とその問題点，母性の発達変容，父性をめぐる現状や問題点など，多くの示唆を与えている（大日向1988）．

こうした時代背景および先行研究をふまえ，本研究は，大学生という母親になる一歩手前の女性達に，そ

1）日本女子体育大学（教授）
2）日本女子体育大学（助教授）

の母親世代と比較しながら，若い世代の育児意識の真実を知ることを目的とし，同時に，育児支援を求めている状況を明らかにしながら，育児意識が育児支援欲求の高まりにどのような関連があるかについても検討することを目的とする．

II．方　　法

1．調査対象

女子体育大学２年生245名とその母親33名．母親の職業の構成は学生12.1%，専業主婦24.2%，パート42.4%，フルタイム21.2%で，年令は，40代75.8%，50代24.2%であった．

2．調査内容

1）育児意識について

①家庭での育児のあり方について：被験者となる学生以外の学生に対し，自由記述方式で得た項目から選択した全２項目で「父親中心か，母親中心の家庭か，それとも父母の話し合いを基本とする家庭がよいか」という家庭教育の担当者の項目と「子ども本位の家庭がよいか，それとも夫婦本位の家庭がよいか」という家族観の項目から成る．

②育児意識について：大日向（1988）の項目を参考に作成したもので，以下の３つの柱に基づく全13項目．このうち子育てを経験した人（母親）のみを対象とした項目が２項目含まれている．

(a)　育児に対する積極的な態度：「育児を有意義なすばらしい仕事と思うか」という有意義感の項目，「結婚してその人の子どもを産むのは幸せだと思うか（母親のみ）」という子持ち幸せ感の項目，「育児は自分にとって生きがいになると思うか」という生き甲斐感の項目，「育てる過程が楽しいといえると思うか」という育児楽しみ感の項目，「子育てによって自分も成長できると思うか」という母親成長の項目の５項目．

(b)　育児に対する消極的態度，あるいは自分の生き甲斐との矛盾に悩む姿：「育児は女性の義務と思うか」という育児義務感の項目，「育児期間中自分のやりたいことが制限されてもしかたないと思うか」という欲求制限受容の項目，「結婚は面倒だけれど，子どもは欲しいと思うか」という子ども願望の項目，「もし仕事と子育ての両立が不可能だった時，仕事を捨てても出産を取ろうと思うか」という子ども優先の項目，「子どもを育てるためには，我慢ばかりしなければならないと思うことがあるか」という育児我慢の項目の５項目．

(c)　育児のあり方のベースとなる考え方：「本能としての母性愛はあると思うか」という母性愛本能感の項目，「男性に育児能力はあると思うか」という男性育児力の項目，「子どもが20歳以上になっても親としての責任はあると思うか」という親の責任範囲の項目の３項目．

2）育児支援欲求について：被験者となる学生以外の学生に対し予備調査をし，自由記述方式で得た項目から選択した全６項目で，「育児を手助けしてくれる友人は十分あったと思うか（母親のみ）」という友人支援存在の項目，「育児を手助けしてくれる人が必要だと思うか」という支援必要の項目，「仕事と子育ての両立を可能にするような育児支援を望むか」という両立支援欲求の項目，「一時育児から逃げたくなった時支援してくれる人がいたらよいと思うか」という逃避時支援欲求の項目，「子どもの成長のためにも，父親がもっと育児に関わるべきだと思うか」という父親育児の項目，「育児をしている友人･仲間との交流は大事だとおもいますか」という仲間交流の項目から成る．

以上の全ての項目は，１，まったくそうおもわない，２，ややそうおもわない，３，ややそう思う，４，非常にそう思う，までの４段階で評価することが求められた．

3．手 続 き

学生には，教室で，配布・記入してもらい，その後回収した（回収率81.6%）．母親については，教室で配布し，学生に家に持ち帰って，記入してもらい，それを回収した（回収率11.1%）．

III．単純集計結果と考察

1．育児意識の15質問項目について（表１参照）

（注：肯定派等の数値は，「非常にそう思う」「ややそう思う」の%を合計したものである．）

A－２，望ましい家庭像として，父親中心の家族がよいですか母親中心の家族がよいですか．

学生Ｇ（Ｇはグループの略．以下同じ）と母親Ｇを比較すると家庭内民主主義の定着度が進んでいること

表１　育児意識と育児支援についてのアンケート調査単純集計表

		父親中心－１	母親中心－２	話し合い－３
A－２	父親中心の家族がよいか，母親中心の家族がよいか，話し合いを中心とする家族がよいか	15.5 (39.4)	9.8 (12.1)	74.7 (48.5)

		夫婦本意－２	子ども本意－１
A－３	夫婦本意の家族がよいか，子ども本意の家族がよいか	16.0 (9.7)	84.0 (90.3)

育児意識について

		非常にそう思う－４	ややそう思う－３	ややそう思わない－２	まったくそう思わない－１
A－１	結婚をしてその人の子どもを産むのは，幸せだと思う	0 (78.8)	0 (21.2)	0 (0)	0 (0)
A－４	育児は有意義な素晴らしい仕事だと思う	41.2 (54.5)	51.0 (42.4)	6.9 (0)	0.8 (3.0)
A－５	育児は女性の義務であると思う	9.0 (12.1)	44.9 (63.6)	33.1 (24.2)	13.1 (0)
A－６	育児は自分にとって，生きがいになると思う	37.6 (42.4)	48.2 (54.5)	12.2 (3.0)	2.0 (0)
A－７	育児期間中，自分のやりたいことが制限されても仕方がないと思う	25.3 (39.4)	65.7 (57.6)	6.5 (3.0)	2.4 (0)
A－８	結婚は面倒だけど，子どもは欲しいと思う	14.4 (3.0)	29.6 (18.2)	28.0 (33.3)	28.0 (45.5)
A－９	仕事と子育ての両立が不可能だったとき，仕事を捨てても出産を取ろうと思う	35.9 (51.5)	46.1 (39.4)	12.2 (9.1)	5.7 (0)
A－10	本能としての母性愛はあると思う	58.0 (69.7)	35.1 (30.3)	4.5 (0)	2.4 (0)
A－11	男性に育児能力はあると思う	29.4 (33.3)	63.3 (48.5)	6.5 (18.2)	0.8 (0)
A－12	子どもが20歳以上になっても，親としての責任があると思う	28.6 (24.2)	51.0 (63.6)	17.6 (6.1)	2.9 (6.1)
A－13	育てる過程が楽しいといえると思う	41.4 (78.8)	52.9 (21.2)	4.9 (0)	0.8 (0)
A－14	子どもを育てるためには，我慢ばかりしなければならないと思う	11.4 (27.3)	50.2 (36.4)	31.8 (27.3)	6.5 (9.1)
A－15	子育てによって，自分も成長できると思う	80.0 (81.8)	18.8 (18.2)	0.8 (0)	0.4 (())

育児支援欲求について

		非常にそう思う－４	ややそう思う－３	ややそう思わない－２	まったくそう思わない－１
B－１	子育てを助けてくれた友人は十分にあった	0 (36.4)	0 (48.5)	0 (12.1)	0 (3.0)
B－２	育児を手助けしてくれる人が必要	70.6 (66.7)	27.3 (30.3)	1.6 (3.0)	0.4 (0)
B－３	仕事と子育ての両立を可能にするような育児支援を望む	60.4 (66.7)	30.2 (24.2)	7.8 (6.1)	1.6 (3.0)
B－４	一時育児から逃げたくなった時，支援してくれる人がいたらよいと思う	75.5 (69.7)	20.4 (27.3)	3.3 (3.0)	0.8 (0)
B－５	子どもの成長のためにも，父親がもっと育児にかかわるべきだと思う	64.5 (69.7)	32.2 (27.3)	3.3 (3.0)	0 (0)
B－６	育児をしている友人・仲間との交流は大事だと思う	78.8 (87.9)	19.6 (12.1)	1.6 (0)	0 (0)

注１：％の基数は学生245，母親33
　２：数字の上段が学生，下段（　）内は母親

がはっきりわかる．母親Ｇの父親中心が40％近い数字というのは家父長主義が依然として幅を効かしていることを示していると思われる．学生Ｇは父親中心の家族15％に対して話し合いを基本とする家族75％と60％との大きな差がある．父親中心の家族を選択した15％は母親Ｇの39％の数値から推測されるように実際の家族が父親中心の家族でそれがモデルになっていると考えられる．

Ａ－３，夫婦本位の家族（例，夫婦単位で行動し，子どもは家で留守番をする等）がよいですか，子ども本位の家族がよいですか．

共に子ども本位が優勢である．この数値は父親は仕事，母親は子育てという女性は子育てを優先すべきという性別役割分業意識の影響も考えられ，将来男女が共に仕事と子育てを両立できるような社会になったとしても子ども本位は変わらないだろう．

Ａ－４，育児は有意義な仕事だと思いますか．

学生Ｇは92.2％が有意義な仕事と答えている．また，母親Ｇは有意義な仕事と96.9％が答えている．大日向の育児意識の調査結果とはかなり異なる傾向を示している．Ｃ世代で40.8％である．この数値について大日向は次のように説明している．「Ｃ世代の特徴は育児の意義をまったく否定しているのではなく，むしろ，自分自身の生きがいや生活を考えたとき，育児だけに専念できないという相対的な評価である」．学生Ｇがこれからのライフスタイルを考えたとき，２年生という学年からしっかりとした職業観や自己実現のための多様な選択肢を持っているということは期待できないにしても，育児だけが有意義な仕事として育児しか選択肢がないといった状況ではないことを確認する必要がある．母親Ｇの有意義という回答率も非常に高く，母親世代から30年の差がある学生Ｇの数値が92％という数値も同じく非常に高い．

Ａ－５，育児は女性の義務だと思いますか．

義務と思うのは学生G53.9％，母親G75.7％である．学生Ｇと母親Ｇの義務と思うという数値を比較すると20％と大きな違いがある．義務とはまったく思わないという数値が母親Ｇが０に対し，学生Ｇが13.1％であった．これは，非婚化，DINKSといわれるように子どもを育てない女性の生き方も認める社会の影響も考えられる．大日向の育児意識調査と比較すると，「義務である」と回答したＣ世代は18.4％であり，「育児は女性だけの義務ではなく，両親や社会の義務である」というコメントが多くつけられていたという．学生Ｇの半数以上が義務であると回答していることは，今なお強い性別役割分業に囚われている実態があると思われる．

Ａ－６，育児は自分にとって生きがいになると思いますか．

学生Ｇの育児肯定派は85.8％，母親Ｇの育児肯定派は96.9％であり，育児を生きがいと思う人は双方高い．母親Ｇは，育児以外の生きがいを持ちにくかった世代とも言えるが，ほとんどの人が育児に生きがいを見出している．

Ａ－７，育児期間中自分のやりたいことが制限されてもしかたないと思いますか．

学生Ｇの肯定派は91.0％である．母親Ｇの肯定派は97.0％である．母親Ｇも学生Ｇも，高い数値を示している．育児以外の明確な目標が持ちにくいという時代性はあるものの，育児というものを何よりも優先すべきかけがえのない仕事という意識が非常に高い．

Ａ－８，結婚は面倒だけど，子どもは欲しいという考えについてどう思いますか．

学生Ｇの肯定派は44.0％，母親Ｇの肯定派21.2％であり，この項目は学生Ｇと母親Ｇの世代間の差がはっきり表われている．今までの質問項目の回答が保守的な傾向であったので，肯定派はもっと少ないと予想していたが，肯定派は44.0％と高い数値であった．結婚にはあまり夢を描けないが子どもは欲しいと思う現代女性の意識を反映しているのかもしれない．

Ａ－９，もし仕事と子育ての両立が不可能だった時，仕事を捨てても出産を取ろうと思いますか．

学生Ｇは仕事よりも出産を優先する肯定派が82.0％と高い．この数値からは，出産よりも仕事をとるキャリア志向派が増加しているといわれる少子化の問題は見えてこない．母親Ｇの肯定派は90.9％であり，仕事を継続することが困難な時代背景とも関わりがあると考えられる．

Ａ－10，本能としての母性愛はあると思いますか．

学生Ｇの肯定派は93.1％，母親Ｇの肯定派は100％である．学生Ｇと母親Ｇの傾向は似ており，母性愛本能説は根強く存在している．

Ａ－11，男性に育児能力はあると思いますか．

学生Ｇの肯定派は92.7％，母親Ｇの肯定派は81.8％である．学生Ｇと母親Ｇともに肯定派が高い率である．育児休業法（1992年施行）後も育児休業をとる父親は僅少であり，父親の育児参加はまだ少数派であった世代にも関わらず，このような高い数値となったの

は，男性にも育児能力があってほしいという希望的な数字と解釈することもできる．

A－12，子どもが20歳以上になっても，親としての責任があると思いますか．

学生Gの肯定派は79.6%，母親Gの肯定派は87.8%である．母親Gはわが子の大学の学費の負担があり，経済的な責任を負わされている．また，精神面での責任も感じていると思われる．

A－13，育てる過程が楽しいといえると思いますか．

学生Gの肯定派94.3%，母親Gの肯定派は100%であり，現実の多くの母親が子育てがつらいという実態（例えば，子ども未来財団，2001）などとはかけ離れた数値である．母親Gの肯定派100%というこの数値はすでに子育ての大変な時期は終わって，過去を振り返ればいろいろあったが，全体から見れば子育てを通して自分も成長でき子どもを育ててよかったという実感からきていると思われる．学生は，肯定感のある母親の影響を受けながら，将来への期待を描いているのであろう．

A－14，子どもを育てるためには我慢ばかりしなければならないと思うことがありますか．

学生Gでは我慢ばかりしなければならないと思う人が61.6%である．項目9の「育児期間中自分のやりたいことが制限されてしかたないと思うか」について肯定派が91.0%，A－13の「育てる過程が楽しい」という肯定派が94.3%という高い数値と関連させて考えると，我慢しなければならないから子育ては敬遠するということを意味するものではないと解釈できる．

A－15，子育てによって自分も成長できると思いますか．

学生Gの肯定派は98.8%，母親Gの肯定派は100%である．ほぼ全員が子育てが自分の成長にもプラスになったと考えており，育児に対して高い有意義感を持っている．

2．育児支援の6質問項目について

B－1，子育てを助けてくれた友人は十分にあったと思いますか．

この質問項目は子育て経験のある人にきいている．学生は経験をしている人が0だったので，回答は母親のみである．母親Gでは，非常にそう思う36.4%，ややそう思う48.5%，ややそう思わない12.1%，まったくそう思わない3.0%であった．肯定派は95%で「公園デビュー」や若い母親が孤立した子育てをしていることが大きな問題になっている状況とは異なる恵まれた子育て環境にあったことが伺える．

B－2，育児を手助けしてくれる人が必要だと思いますか．

学生の肯定派は97.9%，母親の肯定派は97.0%とほぼ同数である．母親はB－1の回答からみられるように，実体験からの確信である．

B－3，仕事と子育ての両立を可能にするような育児支援をのぞみますか．

学生Gの肯定派は90.6%，母親Gの肯定派は90.9%である．A－9の「両立が不可能だったとき，仕事を捨てても出産を取ろうと思うか」に対し，92.0%が出産を取るという数値から，この質問項目に対して肯定派はもっと少ないのではないかと予想したが，90%が両立を可能にする育児支援を望んでいた．しかしこの数値から直ちに強い仕事と子育ての両立願望を持っているとは結論できず，一般論として両立支援をのぞんでいるとも考えられる．

B－4，一時，育児から逃げたくなった時，支援してくれる人がいたらよいと思いますか．

学生Gの肯定派は95.9%，母親Gの肯定派は97.0%であった．B－2の育児を手助けしてくれる人が必要かという質問と同様に肯定派は高率である．

B－5，子どもの成長のためにも，父親がもっと育児にかかわるべきだと思いますか．

学生G，母親Gともにまったくそう思わないという答えは0であったが，ややそう思わないという答えが学生Gに8人，母親Gに1人いた．A－11「男性に育児能力があると思うか」という質問に対し，学生Gの回答はまったくそう思わない2人，ややそう思わない16人であり，関連性が示唆された．

B－6，育児をしている友人・仲間との交流は大事だと思いますか．

学生Gの肯定派は99.4%，母親Gの肯定派は100%である．若い母親の人間関係形成能力の弱さが指摘されて久しいが，子育ては友人や仲間との関係づくりが大事であることが学生Gにも認識されているのであろう．

Ⅳ．結　　果

1．母親と学生の育児意識の構造について

学生と母親とそれぞれについて，育児意識15項目に対し，主成分分析法，バリマックス回転による因子分

析を行った結果，育児意識について，母親も学生もいずれも５因子が抽出された(表２，３参照)．因子抽出にあたっては，累積寄与率が50％前後に至るまでの因子を採用すること，寄与率の低い因子については，因子の意味解釈可能性が明確な場合に採用することを基準にして，最終的には，因子数を指定して析出した．

１）学生の育児意識の構造：学生の育児意識（表２）については，第１因子は，「育てる過程が楽しいと思う（育児幸福)」「子育てによって自分も成長できると思う(育児成長)」,「子育てを生き甲斐と感じる(生き甲斐感)」,「育児を有意義だと思う（有意義感)」「男性にも育児能力はあると思う（男性育児力)」に高い負荷量が示され，いずれの項目も育児に対し肯定感情を持ち，育児は人生を充実させてくれる有意義な仕事であるというとらえ方なので，『学生･育児幸福感』と命名された．

第２因子は，「育児は女性の義務と思う(育児義務感)」,「子どもが20歳以上になっても，親としての責任がある(親の責任範囲)」,「もし仕事と子育ての両立が不可能だったら，仕事を捨てても出産を取ろうと思う（子ども優先)」という項目群からなり，育児によりふりかかる義務感や責任に主に力点が置かれており，『学生・育児義務感』と命名された．

第３因子は,「結婚は面倒だけれども子どもは欲しい（子持ち願望)」「本能としての母性愛はあると思う（母性愛本能感)」の２項目からなり，いずれも，子どもの誕生を願う方向であるので,『学生･母性愛』と命名された．

第４因子は，「夫婦本位の家族構成がよい(夫婦本位)」とする１項目のみなので『学生･夫婦本位』と命名された．

第５因子は,「子どもを育てるには我慢ばかりしなければならない（育児我慢)」「夫婦合議がよい（父母合議)」との２項目なので，子どもを育てるには苦労も多いので，夫婦合議してきりぬけねばならないという因子であると解釈して『学生・育児我慢』と命名された．

２）母親の育児意識の構造：母親の育児意識（表３）については，第１因子は，「男性にも育児能力はあると思う（男性育児力)」「育てる過程が楽しいと思う(育児幸福)」「子育てによって自分も成長できると思う（育児成長)」,「子どもを持つと幸せだと思う（子持ち幸せ感)」に高い負荷量が示され，いずれの項目も育児に対し肯定感情を持ち，育児は人生を充実させてくれる幸福な仕事であるというとらえ方なので，『母親・育児幸福感』と命名された．

第２因子は，「もし仕事と子育ての両立が不可能だった場合仕事をすてても出産を取ろうと思う（子ども優先)」「育児期間中自分のやりたいことが制限されても仕方ないと思う（欲求制限受容)」に高い負荷量が示され，「父母合議」がマイナスではいっていた．つまり，片親中心でもこどもを育てなくてはという『母親・没我』と命名された．

第３因子は,「育児は自分にとって生き甲斐になる

表２　学生の育児意識項目の因子分析結果

	因子				
	1	2	3	4	5
A－13育児幸福	0.717	0.179	0.089	0.091	0.011
A－15育児成長	0.711	0.027	0.063	−0.028	−0.017
A－06生き甲斐感	0.684	0.391	0.046	−0.032	0.025
A－04有意義感	0.661	0.197	−0.019	−0.192	−0.042
A－11男性育児力	0.613	−0.379	0.078	0.007	−0.109
A－05育児義務感	0.096	0.740	0.002	−0.112	−0.041
A－12親の責任範囲	0.142	0.605	−0.038	0.068	0.039
A－09子ども優先	0.365	0.432	0.220	−0.259	−0.067
A－08子持ち願望	0.007	−0.068	0.758	0.122	0.001
A－10母性愛本能感	0.298	0.067	0.562	−0.411	0.162
A－03夫婦本位	0.034	−0.032	0.074	0.901	0.049
A－14育児我慢	−0.440	0.146	0.212	0.079	0.806
A－02父母合議	0.013	−0.267	−0.439	0.087	0.635
累積寄与率％	19.985	32.094	40.762	49.004	57.171

表３　母親の育児意識項目の因子分析

	因子				
	1	2	3	4	5
A－11男性育児力	0.740	−0.064	−0.019	−0.220	0.442
A－13育児幸福	0.708	0.046	0.221	0.057	−0.077
A－15育児成長	0.620	0.186	−0.112	0.212	−0.284
A－01子持ち幸せ感	0.560	0.550	0.351	−0.122	−0.001
A－09子ども優先	0.135	0.790	−0.125	−0.004	−0.153
A－02父母合議	0.180	−0.740	−0.129	−0.252	−0.113
A－07欲求制限受容	0.302	0.597	0.293	0.124	0.124
A－06生き甲斐感	0.341	0.019	0.764	0.327	−0.061
A－04有意義感	−0.110	0.310	0.703	0.021	−0.063
A－08子持ち願望	−0.191	0.099	−0.633	−0.037	−0.153
A－10母性愛本能感	−0.040	0.066	0.119	0.705	0.014
A－12親の責任範囲	0.461	0.060	0.099	0.700	−0.183
A－03夫婦本位	−0.051	0.248	−0.396	0.614	0.166
A－05育児義務感	−0.061	0.109	0.210	0.108	−0.722
A－14育児我慢	−0.235	0.266	0.123	0.354	0.658
累積寄与率	15.532	29.731	43.238	56.193	66.040

と思う（生き甲斐感）」という思いと「育児は有意義なすばらしい仕事である（有意義感）」と「結婚は面倒だけれども子どもは欲しい（子持ち願望）」がマイナスではいっている．つまり育児は有意義な仕事であるが，結婚はしたいという『母親･育児有意義感』と命名された．

第４因子は，「母性愛本能感」「こどもが20歳以上になっても親に責任がある（親の責任範囲）」と「夫婦本位の家族構成がよい（夫婦本位）」とする項目のみなので夫婦本位で長く子供の責任を取っていこうとする『母親・夫婦本位』と命名された．

第５因子は，「育児は女性の義務と思う（育児義務感）」と「子どもを育てるには我慢ばかりしなければならない（育児我慢）」との２項目なので，『母親・育児我慢』と命名された．

以上のように，育児意識の構造は母子間において，多少違いが見られる．学生の方では，育児を幸福ととらえていることが全面に出ており，育児に負の側面があることは認識してはいるが，自身の子どもを望み，夫婦本位の家庭において，苦労や我慢をしながらも，夫婦で合議しながら，協力して育児に携わっていくべきである，という意識構造が表れている．

それに対し，母親の方では，育児を幸せな経験であるが，そのためには没我的苦労もあることを認めた発想が全面に出ており，しかし，その結果として育児の有意義感が出てくるといった構造になっている．しかも，そのためには苦労や我慢も必要だが，それは義務感からではなく，母性愛のもと夫婦本位の家庭で乗り切っていけることを示唆しているのである．

２．母親と学生の育児支援欲求の構造について

母親と学生について，それぞれ育児支援欲求６項目を主成分分析し，Kaiser の正規化を伴わないバリマックス回転を行った結果，学生は１因子のみが抽出され（表４）『学生・育児支援欲求』と命名された．支援は必要であるとし，両立支援への欲求もあり，逃避したくなったときへの支援欲求や父親に育児に参加してほしい希望とともに，仲間との交流に期待をよせている．

一方，母親においては，次の２因子が抽出された（表５）．第１因子は，「育児を手助けしてくれる人が必要だと思う（支援必要）」，「父親がもっと育児に関わるべきだと思う（父親育児）」，「育児をしている友人･仲間との交流は大事だと思う（仲間交流）」の３項目に高負荷量が見られており，育児を手助けしてくれる人がどうしても必要としたもので，かつ，その支援者として父親や仲間との交流に期待を表明したもので，『母･育児支援必要』と命名された．第２因子は，「育児を手助けしてくれる友人は十分あったと思う（母親のみ）（友人支援）」，「仕事と子育ての両立を可能にするような育

表４　学生の育児支援欲求についての因子分析の結果

	因子
	1
B－02支援必要	0.737
B－04両立支援欲求	0.520
B－03逃避支援欲求	0.650
B－05父親育児	0.685
B－06仲間交流	0.613
累積寄与率%	41.608

表５　母親の育児支援欲求についての因子分析表

	因子	
	1	2
B－05父親育児	0.819	－0.205
B－06仲間交流	0.723	0.143
B－02支援必要	0.693	0.270
B－01友人支援	－0.246	0.831
B－03逃避支援欲求	0.404	0.572
B－04両立支援欲求	0.363	0.442
累積寄与率%	21.287	33.176

児支援を望む(両立支援欲求)」,「一時育児から逃げたくなった時支援してくれる人がいたらよいと思う（逃避支援欲求)」の３項目であり，友人が子育てをいろんな側面から手助けしてくれた結果と，そのことに対するますますの期待を表したものとして『母・友人支援(有用性と期待)』と命名された．

以上のように，母子の育児支援欲求のあり方は，学生が，育児未経験のためか，一因子構造で欲求表明をするのみに対し，母親は，支援の必要性を友人や父親に求めながら，育児についての実際の経験から，育児と仕事の両立支援，一時的逃避支援に焦点を絞りながら，友人支援の有用性を評価し，さらなる期待をするといった分化を示している．

３．育児意識と育児支援欲求との関係

１）合成変数の作成

① 学生の育児意識の合成変数：学生の育児意識の構造より，学生の第１合成変数は学生の第１因子の項目を加算して「学生・育児幸福感」と命名，学生の第２合成変数は学生の第２因子の項目を加算して「学生・育児義務感」と命名，学生の第３合成変数は学生の第３因子の項目を加算して,「学生・母性愛」と命名．学生の第４合成変数は，学生の第４因子の１項目単独で「学生・夫婦本位」と命名した．学生の第５合成変数は，学生の第５因子の項目を加算して,「学生･育児我慢」と命名した．さらに，さらに学生の育児意識の全項目を加算した合成変数を作成し「学生・育児意識（全体)」とした．

② 学生の育児支援欲求の合成変数：学生の育児支援欲求の構造より，学生の合成変数は育児支援欲求の項目全部を加算して「学生・育児支援欲求」と命名した．

③ 母の育児意識の合成変数：母の育児意識構造より，母の第１合成変数は母の第１因子の項目を加算して「母・育児幸福感」と命名，母の第２合成変数は母の第２因子の項目を加算して「母･没我」と命名，母の第３合成変数は母の第３因子の項目を加算して「母・育児有意義感」と命名，母の第４合成変数は母の第４因子の項目を加算して「母･夫婦本位」と命名，母の第５合成変数は母の第５因子の項目を加算して「母・育児我慢」と命名した．さらに母の育児意識の全項目を加算した合成変数を作成し「母･育児意識（全体)」とした．

④ 母の育児支援欲求の合成変数：母の育児支援欲求の構造より，母の第１合成変数は母の第１因子の項目を加算して「母・育児支援欲求」と命名，母の第２合成変数は母の第２因子の項目を加算して「母・友人支援」と命名した．

２）育児意識と育児支援欲求との関係

学生と母親それぞれの因子分析結果から作成した合成変数を用いて，育児意識と育児支援欲求の関係について一元配置分散分析を用いて分析した.具体的には，育児支援欲求（全体）得点の平均値以上の人たちを高得点グループ，平均値未満の得点者を低得点グループとして，学生・母親育児意識の各変数の平均値と比較した（表６参照)．

「育児支援欲求（全体)」に対する規定関係において，学生では「育児幸福感」が強い影響関係にあり，「育児我慢」「育児意識（全体)」も影響することが示された．つまり，育児に幸福感をもち，育児のためには我慢もするが，育児を通して母親自身も成長し得るし，生きがい感も高く,育児を意義あるものと考えるとともに，男性の育児力にも期待できるとするような育児意識が高い学生ほど，育児支援欲求が高いことを示唆している．

表６　学生と母親の育児支援欲求（全体）に対する規定関係

学生（N＝241）

	育児支援欲求 低得点グループの平均値	育児支援欲求 高得点グループの平均値	F 値
学生・育児幸福感	16.495	17.180	6.348*
学生・育児義務感	11.952	11.705	0.931
学生・母性愛	5.673	5.885	1.521
学生・夫婦本位	1.170	1.152	0.138
学生・育児我慢	5.104	5.374	3.508+
学生・育児意識（全体）	40.311	41.288	3.384+

*P＜0.05　+P＜0.10

母親（N＝31）

	育児支援欲求 低得点グループの平均値	育児支援欲求 高得点グループの平均値	F 値
母・育児幸福感	14.000	14.900	3.545+
母・没我	8.464	9.150	3.427+
母・育児有意義感	8.846	8.550	0.656
母・夫婦本位	7.308	8.222	5.743*
母・育児我慢	5.308	5.950	3.177+
母・育児意識（全体）	43.923	46.650	7.109*

*P＜0.05　+P＜0.10

また，母親については，「育児支援欲求（全体）」に対して，「夫婦本位」「育児意識（全体）」が影響関係にあり，また「育児幸福感」「没我」「育児我慢」においても影響関係が示され，学生にくらべると，全面的に育児意識と支援欲求の間に影響関係があることが示唆された．

Ⅴ．考　　察

１．育児意識の構造

⑴　学生の育児意識15項目の因子分析の結果の注目点は，『学生･育児幸福感』が第一因子として抽出されたことである．学生の育児意識は非常に高く，育児幸福感や，育児によって自分も成長できるという，しかも育児能力は男性にもあって，育児支援も期待できるという明るいものであった．しかし，第２因子には『学生・育児義務感』が抽出されている．育児は女性の義務であるという意識，仕事と子育ての両立が不可能だった場合，仕事を捨てても出産をとるという項目と育児期間中自分のやりたいことが制限されてもしかたがないという項目とからなり，育児の負の側面にも目をむけていることがわかる．第３因子は，母性愛本能感と子どもの誕生を願う項目から成る『学生・母性愛』因子である．学生が母性愛の何たるかを経験しているかどうかは別にして，憧れに近い形で，子どもが欲しいという願望の表れとともに抽出されたことの意味は大きいと考えられる．第４因子は『学生・夫婦本位』と命名された家庭観で，夫婦本位を選んだのは夫婦を構成する結婚という経験の直前ということもあろうが，自身がこれまで育てられた経験からも，本来育児は夫婦の相談によって行われるべきだ，という発想が基底にあると考えられる．この点は，『学生･育児我慢』と命名された第５因子における，子育ては苦労も多いが，夫婦合議でがんばっていかねばならない，という発想の表明と軌を一にしていると考えられる．

以上のような学生の育児意識構造からは，育児に負の側面があることは認識しつつも，育児は有意義なことであり，母性愛のもと，子どもを持つ（授かる）ことを望み，夫婦本位の家庭において，苦労や我慢をしながらも，夫婦で協力しあいながら，積極的に育児に携わっていくべきである，という，やや

理想型の意識構造が読みとれるのである．

⑵　学生の意識構造に較べ，母親のそれは，すでに育児体験があるということもあり，因子構造は，ほとんど同じ項目を対象にしながらも，かなり異なったものになっていた．まず第１因子は『母・育児幸福感』である．結婚して愛する人の子どもを産む幸せを中心としたものであった．育児の幸せを有意義感より先行させているところが，実際に育児を体験した母親らしい．第２因子は，子ども優先と欲求制限受容から成る『母・没我』である．学生の育児義務感よりも強い形で子どものために尽くそうとする母親の心情が現れている．これも実際の育児の厳しさに接したからこそ出てきた因子であろう．第３因子は『母・育児有意義感』である．学生の第１因子と同じく子育てを生き甲斐とする生活を有意義とする考えである．これが，第３因子として出てきたという点に学生と母親の違いが見いだせる．母親は有意義感の前に育児が幸福なものであり，そのためには，没我も辞せずという覚悟があるようにみえる．第４因子は，母性愛，親の責任範囲と夫婦本位から成る『母･夫婦本位』である．どこまでも親の責任を負おうとする母親の優しさと，夫婦本位で話し合ってというクールさがいりまじっている．第５因子には，マイナスの方向での義務感と，育児我慢から成る『母･育児我慢』である．育児は母親の義務であるという考えに反発しつつ，育児には耐えなければならないこともまた多いとする発想であろう．

２．育児支援欲求の構造

育児支援欲求については，学生は，『学生･育児支援欲求』の１因子のみ，母親は，『母･育児支援必要』と『母・友人支援（有用性と期待）』の２因子が抽出された．第１因子では母親は，育児支援は必要と痛感しており，特に父親と仲間との交流に求めている．第２因子は，仕事と子育ての両立支援や育児から一時的に逃げたくなった時の支援を求めており，しかも，実際に友人より支援を受けたことを認めるともに，そのことを評価して，支援を友人に求めることの価値を表明していると考えられるものである．ここに支援体制を考える時のヒントがありそうである．父親を育児の場に引き出す工夫をするとともに，育児仲間間の交流をはかっていくことが必要とされるであろう．

３．育児支援欲求のない育児困難ケースへの対処

育児意識の低い人は育児支援欲求も低いことが示唆されたわけだが，育児支援欲求をもっていないことは必ずしも支援の必要性のないことを意味しているわけではない．むしろ現場では，より育児困難を抱えている親子である可能性が危惧されており，地域における子育て支援施策の課題として，「来所しない親子」に対してどのようにアプローチするかということに多くの関心が向けられている（太田光洋2003）．子育て困難を抱えつつ誰からの支援も受けられずに孤立している「来所しない親子」に対し，効果的な対応策が打ち出せないジレンマを抱えているのが現状といえよう．子育てに悩み，親としての自信が持てない親は家に閉じこもりがちになりやすく，相談できずに深刻な事態に直面してから介入が開始されるのでは遅過ぎる．幼稚園や保育所，地域子育て支援センター，保健所，児童相談所等の地域の子育て支援機関を利用しない人に対する支援をどのようにするかは，大きな課題である．特に，幼稚園や保育所は，個人の家にアウトリーチすることができないところに支援の限界があり，地域の子育て支援機関や児童委員・主任児童委員と連携を図りながら支援活動を展開することが求められている（名倉啓太郎監修2004，p.125）．

また，新生児期はマタニティブルーズや産後うつ病等が発症しやすい時期にあり，発症要因として身体・生物学的要因とともに家族関係や子育てにかかる支援の欠如など心理社会的要因との関連も指摘されている．「産後ストレスを感じた時期は」との問いに５割強の人が産後１ヶ月と答えており（福川須美2004），新生児期は心配以上に手助けが欲しかったとする者も多い（厚生労働白書2003）．母親が今まで育児について一番心配だった時期として１歳半以降をあげる人も多く（大阪府調査），育児支援ニーズの時期的な濃淡についても十分な認識が必要となろう．

問題が解決されるためには，まず問題意識をもつことが必要であり，それをもたない親の場合は，保育者だけがなんとかしたいと問題をかかえこむことになって，対応に苦慮することもある．相談するとは，子どもの行動や自分のやっていることに問題を感じることから始まる（伊志嶺美津子2003，p.76-81）．育児支援欲求を自覚したとき初めて本人からのSOSの発信が可能となるのであり，育児支援欲求を規定する育児意識の構造的理解から，早めのSOS信号を出せるように本人への支援をしていくことが課題である．

4．政策課題としてのジェンダー意識の変革と育児支援

育児意識と育児支援欲求の関連性を考察するにあたり，人々のジェンダー意識の変革が政策課題として登場してきたことを押さえておく必要があるだろう．1994年の「エンゼルプラン」では，あくまで従来の日本的雇用慣行と性別分業の尊重という前提のもとでの就業女性の育児支援策であったが，そのスタンスが変わってきたのは，1997年の人口問題審議会の「少子化に関する基本的考え方について（報告書）」（人口問題審議会1998）からとされる．少子化の要因への政策的対応は，労働，福祉，保健，医療，社会保険，教育，住宅，税制その他多岐にわたるが，中核となるのは，固定的な男女の役割分業や雇用慣行の是正と，育児と仕事の両立に向けた子育て支援である，とまとめた．日本社会のありようそのものに批判の目を向け，日本の女性をめぐる社会全体の根本的改革こそが必要であるとしたのである．日本の社会全体の仕組みや家族政策の基本理念が，性別分業による世帯主・伝統主義的モデルから，男女共同参画社会，性別公平モデル（Egalitarian/Gender Equity）へと転換した大きなターニングポイントとなった（前田2004，p.31）．

育児意識に関する1992年の調査結果では，９割近い既婚女性が「少なくとも子どもが小さいうちは，母親は仕事をもたずに家にいるのが望ましい」と答えるなど，「母親は育児に専念するもの，すべきもの」であり，「子どもは三歳までは，常時家庭において母親の手で育てないと，子どものその後の成長に悪影響を及ぼす」といういわゆる三歳児神話は根強く存在している．こうした三歳児神話に対し，1998年版『厚生白書』にて，少なくとも合理的な根拠は認められないと記述された．母親が育児に専念することは歴史的に見て普遍的なことでもないし，たいていの育児は父親（男性）によっても遂行可能であり，むしろ母親と子どもの過度の密着が弊害を生んでいるとの指摘もなされている（厚生白書1998）．

しかし，政府による育児におけるジェンダー意識の変革や三歳児神話の否定にもかかわらず，本調査においても，仕事と育児を両立させようという意識は希薄であり，この点においてはむしろ育児意識は過去に回帰している感が否めない．次世代の若者と高齢世代が子育て観・生き方観に似た回答傾向をもつ先行調査も見られるが（川井他2003），実際の子育て経験のない若者にとっては想像の世界の回答であり，親世代の子育て観・生き方観に影響を受けた可能性は十分に考えられる．思春期・青年期に高度成長期の激動する価値観を体験した親世代とは別の，新たなミレニアムの子育ての経験とともに，育児意識や育児支援欲求は変容していくことであろう．

5．育児支援の充実と育児意識の変容

今後少子化の影響による労働力人口の減少への対応として，女性の就労の拡大が時代の要請であるとしても，今のところ仕事と育児の両立を志向する女性が多数派になる可能性はなかなか見えてこない．しかし，各種の意識調査では，継続就業を望ましいと考える女性の割合は着実に増加する傾向にあり，また，仮に出産や育児の際の休業制度や保育制度が整っていれば継続就業を望む女性の割合は相当程度増加する，といった結果が見られる（人口問題審議会1998）．このことは，育児と仕事の両立に向けた支援環境を充実させていくことが育児意識の向上につながっていく可能性を示唆しているといえよう．

また，『平成15年度　子育てに関する意識調査報告書』（こども未来財団2004）によれば，子育てに対する周囲からの手助けは，フォーマルなものであれインフォーマルなものであれ，それがある方が子育てのイメージが良好となり，また不安や負担・孤立感等も少なくなるという結果が示されている．また，インフォーマルな手助けについては，物理的距離が近いもの（例えば同居の親）よりも心理的距離の近い者（例えば気軽に助けを頼める子育て仲間）に依る方が，より良い影響をもたらす結果となっている．本論の調査結果でも，育児支援を必要と痛感し，特に父親や仲間との交流を求めている母親は，高い育児意識と相関をもつことが示されており，先の先行調査とも一致するところである．

以上，育児支援の充実は育児意識の向上をもたらす可能性が示され，育児支援体制を整備していくことが次世代の子育てに大きな影響を与える要素となることが考察される．

＊本稿は，平成17年度二階堂奨励研究費の補助を受けて行った研究の成果である．

引用・参考文献

１）福川須美・杉山千佳（2004）「妊娠期～２歳までの子どもと家庭への支援プログラム開発に向けての調査・研究」

こども未来財団平成15年度調査報告.
2）原田正文（2006）『子育ての変貌と次世代育成支援－兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防』名古屋大学出版社.
3）伊志嶺美津子・新澤誠治（2003）『21世紀の子育て支援・家庭支援－子育てを支える保育をめざして』フレーベル館.
4）伊藤わらび「保育学生の変容と保育者養成の今日の課題－20年間における保育学生の生活実態と意識に関する調査結果を通して」保育研究所編『保育の研究』No. 18，草土文化社，pp.82-87.
5）人口問題審議会（1998）『人口減少社会，未来への責任と選択－少子化をめぐる議論と人口問題審議会報告書』ぎょうせい.
6）柏木恵子（2001）『子育て支援を考える－変わる家族の時代に』岩波書店.
7）こども未来財団（2001）『平成12年度　子育てに関する意識調査事業調査報告書』.
8）こども未来財団（2004）『平成15年度　子育てに関する意識調査報告書』.
9）厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化対策企画室（2004）『少子化に関する意識調査研究』.
10）前田正子（2004）『子育てしやすい社会－保育・家庭・職場をめぐる育児支援策』ミネルヴァ書房.
11）三鷹市（2004）『三鷹市次世代育成支援に関するニーズ調査報告書－ふれあいと支えあいで子育てにやさしいまちづくり』.
12）村山祐一（2001）「保育所における子育て支援の展望と課題」保育研究所編『保育の研究』No. 18，草土文化社，pp.28-47.
13）村山祐一（2004）「保育園・幼稚園における子育て支援の課題－村山科研「保育・子育て全国３万人調査」をてがかりにして」保育研究所編『保育の研究』No. 20，草土文化社，pp.45-61.
14）名倉啓太郎監修，金田昭三・松川秀夫編著，大塚健樹・渡邉千恵子他（2003）『家族援助論－子育てを支える社会構築』同文書院.
15）日本子どもを守る会編『子ども白書』各年版，草土文化.
16）内閣府『少子化白書』平成16年版，平成17年版，ぎょうせい.
17）内閣府大臣官房政府広報室世論調査担当（2004）「子育ての楽しさ，辛さについて」『国民生活に関する世論調査平成14年６月調査』.
18）大日向雅美（1988）『母性の研究－その形成と変容の過程：伝統的母性観への反証』川島書店.
19）大阪府「地域母子保健サービスに関する研究－新しい乳幼児保健活動の標準方式の策定のための研究－」（大阪府下Ａ市の1980（昭和55）年生まれの全児を対象に経年的に行われた育児不安や育児環境に関する調査）.
20）太田光洋（2004）「地域における子育て支援の実態と支援内容・方法に関する実証的研究－親と子にとっての最善の利益を保証する支援のための基礎理論の構築」こども未来財団平成15年度調査報告.
21）渡邉寛・川井尚・小山修他（2003）「「横並び型アクションリサーチ（アンケート方式）」による子育てネットワークの形成と活性化に関する研究」こども未来財団平成15年度調査報告.
22）全国保育団体連絡会・保育研究会編『保育白書（各年版）』ひとなる書房.

（平成18年９月12日受付
平成18年12月５日受理）